

近藤先生の思い出のひとこま

著者	祖父江 昭二
雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	104-106
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019276

大学への講演に來られた近藤さんを、あとにもさきにもただ一度、私の寓居にお迎えしたことがある。焼かず、売らずにと、必死に守って來ていた私のささやかな蔵書を見て、近藤さんが満足げなことばを下さったのを嬉しく思った記憶がある。やがて日本評論社の文学史辞典にも一、二項目の執筆の依頼も來たし、私自身志を立て直して出京することにもなった。近藤さんからは、学問もさることながら、人生の道の教えを受けられることを何よりも期待した。

近藤さんは學術會議にも出られたし、インドやソ連などにも出かけられた。この人に任せておけば、日本の新しい道に絶対にまちがいはないと、信じてやまなかった。私にとってそういう信頼感をいだかせる数少ない一人が近藤さんであった。その近藤さんが、貴君のような人もほしいのだといって、私を法政大学の講師に迎えて下さった。病気の故に他の兼務をすべてことわった今も、法政だけはなお続けさせてもらっている。今の学生諸君にはかえって迷惑だろうと気の毒にも思うのだが。

晩年の近藤さんが、「老年というのはほんとうに楽しいものですねえ」と、洩らされたことばが、今しきりによみがえる。数年前私が見ずからの希望を、「老木の花」という世阿弥の語を引いて書いたことがあったとき、近藤さんは、まだそんな語を君が使うのは早過ぎると、たしなめて來られたことがある。きょうこのごろ私もどうやら、近藤さんの言われた老年の楽しみがどんなものであったか、ぼつぼつ思い当たって來るようにもなったし、自分もあんなふ

うであられたらと、羨ましくも思うことがしばしばである。それにしても、もっともっといろいろとお話し合う機会を作っておけばよかったと、悔やまれてならない。

(明治大学教授)

近藤先生の思い出のひとつ

祖父江 昭二

近藤先生にはじめて接したのは、記憶に間違いなければ一九四六年、ぼくが旧制武蔵高校の一年生の時で、非常勤務師として來られた先生の講義を、先生のことは何も存じあげないまま受講したのであった。それ以来、とぎれとぎれに、あまり深くもないかわりを持つ不肖の弟子にすぎなかったが、ただ先生の最後の勤務校となつた和光大学に、ぼく自身もつとめるめぐり合せになり、やや親しく先生に接する機会に恵まれた。

勤務先が同じ関係になった年の秋、日本文学協会の関西大会が奈良で行なわれた。一緒に行かないかというおさそいがあり、おとも

することになった。大会前日の朝、東京駅にあらわれた先生のお顔には血が出ていた。新宿でおりようとしたのだが、こちらがおりる前にもうどっと乗ってきて、網棚に置いてあったカバンをひったくるようにしてかろうじておりることができた。その時できた傷だと説明され、いやあ、ぼくのような人間は電車にも乗れませんな、と慨嘆された。

京都に着いてコンコースを歩いていると、何と同志社の広川（勝美）君が人を探すようにしてこちらに来了。まさかと思ひながら呼びとめると、案の定、益田先生は御存知ないかとおっしゃる。その日の午後、同志社では益田勝実さんと呼んで講演会を開くのでお出迎えにきたとのこと。結局、広川さんは、益田さんを囲んで夜の懇親会に近藤先生も招待せざるを得なくなり、当然、ぼくもそのお相伴にあずかることとなった。

京都には例の亀屋という定宿がおりだったが、この時はその亀屋が大改築とかで、祇園の中にある小さな宿屋を劇団民芸の線でお取りした。この旅館がお氣に召したらしく、その後も、一、二度、お世話をした。しかし、その時はあがりもせず、玄関先に荷物を置いて晩飯をいらないと言ひおき、急いでかねての予定通り叡山に向った。「母の骨を納骨してあるのでね」と言われたが、はじめて近藤先生のお宅にうかがった時、お部屋に、「母ひとり子ひとり」の御母堂が若き先生に宛てられた訓戒のお手紙が額に仕立てられてかかげられてあったのを思い出した。ぼくら和光大学の若いものは、

よく「名は体をあらわさず」、その証拠に近藤は不「忠義」だなどと冗談を言い合つたものだが、不「忠義」の近藤先生は、親思いで不「孝行」ではなかった。

お参りのあと、これまた予定通り山を歩いて坂本へと下りた。先生は脚がご自慢だったが、この時は坂道で尻餅をつかれたりした。その時の先生の照れた、しかし楽しそうな笑い顔はいまも忘れられない。そんなわけで、先生のたてられた予定よりは時間がかかって、かなり暗くなつてから坂本につき、そばを食べ、あわてて益田さん主賓の席にかけつけた。

翌日、京都駅の三階（？）にあるお茶漬屋で早い昼飯を食べさせられ、国鉄奈良線の切符を買った。関西のことはよくは知らないの、ただただ近藤先生のあとをついて動いたのであったが、乗った国鉄奈良線の電車は、奈良までは行かぬもので、奈良まで行く次の電車は一時間とか二時間とか待たねばならなかった。致し方なく、何と言う名の駅だったか、近藤先生の指示で下車し、歩いて近鉄の奈良線の駅に向つた。「大丈夫でしょうか」とぼく。「ここらへんは小原（元）君たちとサイクリングをしたところですよ」と先生。しかしそれは戦前のことで、道行く人にいろいろと尋ねながら、何とかいう駅にたどりつき、奈良へ行く急行の電車が通過するのをじりじりした気持ちで眺めながら、ようやく鈍行で西大寺にたどりついた。ここで奈良行きに乗りかえるのであったが、ようやくこの頃になると、不敏なぼくもただ近藤先生に従っているだけではいけないのだ

と自覚させられるようになった。車内放送に注意し、停車ホームの反対側に奈良行きが来ると知った。電車が来た。乗ろうとすると、先生がいっしょにやらない。ふと見ると、先生はホームの階段を上ってブリッジの一番上からぼくを見下しておられた。「近藤先生」とぼくはなりふりかまわずどなった。まわりの人びとがみなぼくの方をふり向いた。その多くの視線を熱く感じながら、ぼくは「先生、こっちです、この電車ッ」としまろうとするドアに手をかけながら、いま一方の手で目の前の電車を指さした。車中で先生は、「昔はブリッジを渡ったはずだったが……」とおっしゃった。

そんなわけで一時ごろつくはずの会場へ、このキホーテとサンチヨがたどりついたのは、結局、三時すぎごろではなかったろうか。夜の懇親会で、かんじんの学問的な報告には間に合わなくても、酒の出る懇親会には熱心な方もおられて……といった、関西支部の方の歓迎のテーブル・スピーチを耳にしながら、ぼくはアルコールのたぐいを飲んだ。帰りはほかの皆さんと御一緒に近鉄奈良線の特急に乗ることができたが、京都まで一時間とはかからなかった。しかし先生は、「こちらの方が早いすな」とさえもおっしゃらなかった。

(和光大学教授)

近藤先生とのかかわり

井上頼豊

ひとつのことが相手の人生を変える、ということが稀にはあるものです。近藤先生と私とのかかわりが、まさにそれでした。

母一人子一人の家庭で育った私が、昭和五年、十八歳で東京音楽学校(今の芸大音楽学部)に入った時、国文学を受持っていたのが近藤先生でした。講義のなかで先生は、音楽学生は音楽だけでなく社会全体に眼をむける必要があることを、たくみに話されていました。むろん当時の軍国主義の日本では、これは非常に勇気のいることでした。

その年の秋、母がなくなりました。母はお寺の娘でしたが、晩年洗礼をうけていたので、臨終の枕べに牧師がかけつけてきました。ところが、母のまわりにいた親族たちは、牧師をみると一斉に席を立ち、一人も母の最期を見とらなかったのです。私は大きなショックをうけ、親族たちへのそれまでの信頼感も失い、はじめて戦前の封建的家族制度のあり方に疑問をもちはじめました。しかし自分では正しい結論が出せず、悩みぬきました。

翌年の正月、近藤先生のお宅へはじめて伺った時、私は思いきつ